

木原武一著「大人のための偉人伝」新潮選書、新潮社 1989年7月20日刊を読む

天才の学び方(16) カーネギー (1835 ~ 1919)



- 両親は貧乏ではあるが正直者。
かせいだ1ドルは一家の血であり肉であった。
その時々の収入額を忘れずに記している。
金銭感覚と疲れを知らない金銭への執着心。
小さい頃から金銭というものにたいして非常に鋭敏な感覚を養っていた。
- カーネギーは、21歳のとき、最初の投資を行っている。
500ドルを親戚から借り集め、ある輸送会社に投資して、最初の配当10ドルを手にしたとき、彼は「金の卵を生むアヒルを私は捕まえたのであった」と言っている。
- 投資とは新しい会社の共同出資者になること。
重役会議の議事録にはいつも必ず目を通し、それぞれの重役の発言にきびしいコメントをつけ、こまかい指示をニューヨークから、そして、しばしば滞在中の外国から送りつけた。
- どんな無理なことであっても、労働者の要求ならばいつでも聞き入れる極端な態度を共同出資者から非難されていたが、「私たちの従業員への友情ほどよい配当をもたらす投資はない」。
- 慈善事業も配当を社会に委ねるための一種の投資。
慈善資金の使い方を慎重に吟味。慈善事業こそ社会をよくするための最高の投資と考えた。
- カーネギーのもう一つの関心は、みずからの教養を高めること。
当時のアメリカの最高レベルの学者、知識人、作家などが集まるクラブに出入りし、エマーソンや後の大統領となるセオドア・ルーズベルトといった人々と親交を結ぶ。
- 新聞への投書は生涯にわたって続く習慣となった。
ちなみに最後の20年間に、ニューヨークタイムズとロンドンタイムズに合計177通の投書を行っている。
- 人格を高めるような生き方を選ぶように気をつけなければならない。
教育を受け、徹底的に本を読む生活を送りたい。
- 生きているあいだに、みずからの判断によって慈善的事業のためにすべての富を使う。富が社会のために真に生かされるような「科学的慈善事業」を構想。
- 図書館こそ私の大学だ。彼が生涯に建設した図書館はニューヨーク市の図書館をはじめ、アメリカ内外に全部で2811にのぼる。但し、寄附するのは建物の建設費だけ。蔵書の購入費や維持費などは町や村のほうで負担。カーネギーからの寄附金は公共の投資を引き出す呼び水。
- 教会にはオルガンを寄附。オルガン購入額の半額のみ。寄附を受ける側もそれなりの努力を払ってしかるべきだ。
- 自ら納得できるような目的でなければ、1ドルも出そうとしなかった。
- NYにカーネギー財団をつくる。

